令和6年度 第2回江別市総合戦略推進委員会 会議録（要点筆記）

日 時：令和6年10月1日（火）午後6時から午後7時13分まで

場 所：江別市民会館2階21号室

出席委員：福沢康弘委員長、龍田昌樹副委員長、保田真希委員、布施望委員、
佐々木尚弘委員、佐藤裕則委員、畠山真理委員、干野里佳委員、佐藤誠一委員、
小橋恵美委員、鈴木笑子委員
（計11名）

オブザーバー：北海道石狩振興局地域創生部 矢野敦子部長、
日本IBM（株） 佐藤潤マネージング・コンサルタント

欠席者：伊藤亮子委員

事務局：三上企画政策部長、伊藤企画政策部次長、中島デジタル政策室長、
天明屋デジタル政策担当参事、鈴木主査、馬場主査、但馬政策推進課参事、
北島主査、眞鍋主査

傍聴者：1名

会議概要

1 報告事項 (1) 人口減少対策を考えるワークショップの主な意見について

【資料により事務局説明】

○福沢委員長

事務局からの説明に対し、委員の皆様からご質問やコメントはあるか。

【各委員：無し】

2 協議事項 (1) 第3期江別市総合戦略骨子（案）について（資料2）

【資料により事務局説明】

○福沢委員長

市としてはまずこの骨子を固めた後に、数値目標や具体的な施策、そしてそれらを支えるDXの視点を作っていきたいということである。委員の皆様からは、主にその骨子の基本的方向などについて、大きな視点あるいはそれぞれの立場からご意見、ご提言をいただきたい。

項目ごとに順番に進めていく。

まず資料2の4ページのローマ数字のⅢ、総合戦略の基本的な考え方に示されている、目指すべき理想像、地域ビジョンについて協議する。

ご意見、或いはご感想でも構わないが、いかがか。

○佐藤裕則委員

少し戻って2ページの(2)、骨子案の作成にあたって留意した事項の4、3番目について伺いたい。ラピダス社や、北海道ポールパーク等の道央圏の立地の機をとらえた企業誘致等の取組の推進とあるが、表現自体は問題ないと思うが、ラピダスとポールパ

ークとでは誘致の対象が全く違うように感じる。ボールパークは観光の要素かなと思ひ、誘致の内容をまとめすぎているのではないか。

○福沢委員長

佐藤委員のご発言は5ページの内容にも関連してくる内容だと思うが、私も同じ感想を持った。5ページで言えば、道央圏にラピダスやボールパークがあって、立地の機をとらえた企業誘致という、具体的な施策に落とし込んでいった時に難しいなと感じた。

○事務局

委員長と佐藤裕則委員のご指摘について、まず2ページのところの留意した事項というのは、業種によらず道央圏にいわゆるビッグウェーブがきているという視点である。

また、5ページの基本目標1では、1つ目の道央圏の産業集積の機をとらえたという部分がラピダス社に関連するものと考えており、ボールパークの方は観光の要素が強く、4項目目の、地域資源の面的連携による周遊観光の促進に含むと考えている。

事務局としては、この総合戦略本体自体に、例えばラピダス社やボールパークといった固有の表現にはしない考えである。

○福沢委員長

繰り返しになるが、道央圏に様々な企業立地の機をとらえた企業誘致というところが具体的な施策に落とし込むときに、ちょっと矛盾が生じないかなど。経済部や企業立地推進室との連携がより重要になってくるのではないかという感想である。

他に資料2の4ページの全般的なところで、何かご意見ご感想はあるか。

○佐藤裕則委員

基本目標2の「江別への新しい人の流れを作る」というところだが、これを見ると江別に生まれ育ったお子さんにずっと江別に住んで欲しいということと、大学に進学して他の地域から来られた学生さんに卒業後も住んで欲しい、あとは別の市外から移り住んで欲しいということが主眼となっている。

まさにその通りと思うが、転出していく人を止めることは容易ではなく、問題はまた江別に住もうと思うような取り組みや、さらに移住してくる人も住んでみたいまちであることが、やはり重要だと思う。そういった政策なり表現なりがあってもいいのかなと思う。

兵庫県の豊岡市は若者回復率という独自の指標を作っている。従来の人口が流出した分と20代以降に戻ってくる人の人口の差について調査し、様々な施策に取り組んでいる。例えば、特に女性のUターンが少ないので、女性が戻ってきたくなるような取り組みをしていると聞いた。

それが良いかどうかは分からないが、そのような江別から他地域に移り住んだ人がまた江別に戻ってきたいと思えるような取り組みが重要ではないかと感じた。

○福沢委員長

ただいまのご発言は、基本目標の2にも関連するものと理解するが、事務局から何かコメントあるか。

○事務局

佐藤裕則委員がおっしゃったのは、まさに、基本目標2の「江別への新しい人の流れを作る」というところかと思う。4ページの「総合戦略の基本的な考え方」の部分

では、「行き交う」のところに含まれている。「市内に4大学が立地する特性を生かした取組の推進と大学との連携強化」、そして「集う」という意味では、江別の大学を卒業して仮に札幌で就職した後も、子育て世帯になったときに、江別市にもう一度戻ってきてもらえればというところを、この「集う」という思いに込めたところである。

○福沢委員長

今、議論している4ページの「総合戦略の基本的考え方」の内容があって、それが5ページ以降に落とし込まれている。細かい内容については、また、5ページ以降のところで議論させていただきたいと思う。差し当たりこの4ページで何かご質問があればお受けしたい。

【各委員：無し】

○福沢委員長

それでは5ページ以降の4つの基本目標について議論していきたい。まず、基本目標1について確認していく。

これら4つの基本目標すべてに共通しているが、「具体的な施策」や「KPI」、それから「DXの視点」は、今回は示されておらず、次回以降示されるということなので、今回はこの「基本的な方向」についてご意見をいただきたい。

この5ページ、基本目標1は主に経済に関する部分ということである。基本的方向が4点あり、そのうちの3点が新しく加えようとする内容ということになっている。ここに関して皆様のご質問ご意見があればご発言願う。

先に委員長の私からの発言となって申し訳ないが、先ほど述べたように「道央圏への産業集積の機をとらえた企業誘致」というのが、具体的にどのような施策に落とし込んでいくのかが非常に難しいという感想を持った。

○布施委員

基本的方向の3つ目のところで、「農業の生産性の向上等を目的としたスマート農業の推進」という記載で、冒頭の「農業の」部分がいららないかなと思う。「生産性の向上～」から始まっても良い。

○福沢委員長

農業が重複している。文法的には、「スマート農業の推進」ということで良いと思われるので、事務局の方で文言についてはご検討いただきたい。他にはいかがか。

○佐藤裕則委員

基本的方向の4番目で、地域資源の面的連携というところが、あまり具体的に思い浮かばないが、もし具体的な例があれば説明してほしい。

○事務局

面的連携という意味は、江別市では農業や窯業など多方面で産業があり、観光地としては、拠点整備交付金を活用した北海道林木育種場の旧庁舎や、旧町村牧場、その他江別蔦屋書店、それから千歳川流域でのかわまちづくりも進んでいるため、どこか1つというところではなく、この江別市全体で周遊観光をしていただきたい、一か所

の特色ある観光施設に集中するというよりは、江別市全体としての面で観光していただきたいという思いがある。

○小橋委員

今お話のあった面的連携というところが江別市全体でという意味であれば、もう少しわかりやすい表現にさせていただくと読みやすいと思った。

○福沢委員長

ご提案の文言については事務局の方で検討していただければと思う。

○龍田副委員長

これまで、産業拡大や観光のことで、ラピダスやボールパークを例として挙げつつも、事務局の回答を聞くと地域資源の面的連携というのは、江別市に限定したような言い方だったように思われる。

江別市の利点で言えば、江別市内でいろいろなものが取りそろえるというのがあるが、ボールパークにも近いとか、ラピダスへは通勤圏であるとか、札幌のすぐそばであることのほか、北側を見ると広大な農地もあり、おいしいものもたくさんあるといった利点もあるのではないかと思う。

江別市内に固執することによって逆に狭まってしまう可能性もあるので、あえてすごく大きい面でもらえてもらい、江別は利便性が高いというところをもう少し言っても良いのかなと思う。もしかすると地元の農家さんや商店さんにとってはよろしくない話かもしれないが、最終的に人口が増えるということを考えた時には、やはりそれも一つのポイントではないかと思った。

○福沢委員長

広域的な視点として、こうした意見も出たということで、事務局の方で検討をお願いしたい。

他にこの5ページについて何かあるか。

【各委員：無し】

○福沢委員長

続いて6ページに移る。基本目標2である。

この目標は、先ほど事務局から説明があったように移住や定住のほか、関係人口或いは大学生に関する部分となる。基本的方向が4点掲げられており、そのうちの1点が新しく加えようとする内容となっている。

この6ページの内容について、皆様からご質問ご意見あるか。

○佐々木委員

基本目標2と3に関わる場所であるが、先日の北海道新聞で、小6、中3対象の学力テストに関して、江別市内の学力が全道的にも全国的にも非常に高いという記事があり、大きくPRしにくいところかもしれないが、この新しい人の流れを作るとか、子育て世代を江別市内に来てもらうという意味では、何かしら広報しながら使っていくかというのが一つ。

基本目標1にも関わってくるが、例えば工場などが新たに進出しようとする、必

ず、パートさんを確保できるかどうかなど、マーケティングを含めて調査している。その時に子育て世代や主婦層がどれほどいるのかというのは必ず調査されるので、ここ数年の江別市は新しい戸建住宅がかなり建っていて、子育て世帯が増えてきているという流れを止めないようにしていくことで、人口も維持できるし、企業招致にも繋がってくるかなと思う。

ただ、企業の方とお話すると、やはり江別市内には工場を建てられる土地が無いというのが現実的にあるので難しい問題ではあると思うが、これらにも取り組んでいただければと感じた。

○佐藤裕則委員

4番目の大学に関してだが、この文自体は良いとは思いますが、内容的に、「魅力ある大学づくりの支援」と言ったときに、行政から大学に対して何か支援するという事ではないと理解している。大学のカリキュラム自体は大学で決めるものなので、若者を惹きつける環境などという意味かと思う。例えば酪農学園大学なら、大学やその周辺について、別の地域に住む人々にとって、大学ライフやキャンパスが素晴らしいと感じてもらえるように支援するという事なのか。

○事務局

佐藤委員から「惹きつける」というのは、立地とかキャンパスライフのようなものかというご質問かと思うが、やはり進学するにあたり高校生が何を基準に大学を選ぶかというのは様々な要素があると思っている。一つは、委員がおっしゃったように、立地がいいとか、キャンパスライフや自然が良いということもあるだろうし、大学はどのような研究をされているのかということも十分あろうかと思う。江別市としても大学の先生方と協力して研究費を助成するといった取組もしているが、例えば、現在、内閣府の地方の大学を支援する制度があり、もし市内の大学に興味があれば、江別としても何かしらの支援を行うことで、大学の魅力づくりに資することができるのではないかなと考えている。

○島山委員

大学のところに関連して、私たちの関連する団体の方で、大学生がなぜ江別市以外の雇用を選んでしまうのかということに関して、アンケートや大学の方と実際にお話したところ、やはり江別に雇用がないということが大きく挙げられている。ただ、選ぶ機会として、江別を雇用の場所や卒業後も住みたいと思ってもらえるにはどうしたらいいかを大学生に聞いたところ、江別の人と関わる機会が多いとやはり愛着が湧いて江別に残るきっかけになったということなので、そういった機会が与えられるような仕組みができればと思った。

○福沢委員長

ありがとうございました。意見として承るということでよろしいか。

○保田委員

今の議論に重なる部分であるが、学生、若者もそうだが一旦仕事を辞めた人たちがまた働きたいとかここに残りたいって思えるような魅力も伝えていく必要があるのかなと思う。札幌や北広島にも近いし、地域性は非常に良い部分がある。

江別に住んで他の町で働くこともできるし、逆もある。そうした時に江別の良さが

他の人たち見えにくい部分があると思っている。「若者を惹きつける魅力ある大学づくり」だけではなく、一つ目のシティプロモーションに関わってくると思うが、江別の魅力、これは若者だけではなく、年を重ねていっても、やっぱりそこで住みたいって思える魅力をもう少し前面に出して、誰に対してもが魅力あるというところに繋がるのかなと思った。一度辞めた後も働けるとか雇用の部分もあるのかなと思う。

○事務局

畠山委員、保田委員のご意見は、全体に影響する内容と捉えている。基本目標1では中小企業という話であるし、次の基本目標3では子育て中のお母さん方の働き口というような内容も含まれている。保田委員のお話としては、良さをしっかりと伝えていかなければということがメインだったと思うので、基本目標2の1つ目にある「江別市の価値を高めるシティプロモーションの推進」の中で、江別市の良さをしっかりと、働いている方や江別に住んでる方も含めて伝えていきたいと考えている。

○佐藤裕則委員

先ほど、小中学生の学力の話で、最近、学力と体力が比例することが大学でも研究されて明らかになっている。例えば、小学生に授業の前に毎日運動する時間を設けて、習慣づけてやることで学力に結びついた例があるので、戦略に落とし込むことはないが、そういったことも住んでみようということになるかもしれないと感じた。

基本的方向の中に、住んでみたいまちにしたいという江別市の思いはとても伝わるが、もう一度江別に住んで欲しい、帰ってきて欲しいというニュアンスをもう少し盛り込んでも良いかなと思った。

○龍田副委員長

大学と行政の連携は随分取り組んでいるが、あまり効果が出ていない。言い方を変えれば、行政サイドが大学生を何とか定着させたいとの思いは大学生に響いてない。現実的に不景気の流れもあって地元で雇用できない側面もあるが、都市部に学生が流出してしまっていて、行政の取組効果はあまり出ていないということをまず、認めた方がいいと思う。その上で、この基本目標2の「えべつへの新しい人の流れを作る」では、多少ドラスティックな話かもしれないが新しい大学の誘致など、そのぐらいやらないとなかなか響いてこないのではないかな。先ほどの愛着についても、もっと小さいときの愛着の方が強かったりと思う。小さい時に経験したお祭りをもう一度地元に戻ってということを見ると、若い世代に愛着心を持たせることによって、UターンやIターンということが芽生えると思う。

本当にこの新しい人の流れを作ることを考えたら、新しいものを持ってくるということを多少、匂わせてもいいような気がするという意見である。

○事務局

龍田副委員長の小さいころからの愛着に関して、ワークショップの中でも東川町のあなたの椅子プロジェクトを例として、話題になっていたので報告する。

○小橋委員

愛着に関して、もちろん、若いころに培っていくことは大事であると思うが、私が読んだ文献によると、愛着を形成するのに年は関係ないを書いてあった。自分にとって必要な関係性を築ける環境や人がそろっていれば、そこに愛着というものが生まれ

てくる。そのように考えると、例えば、学童保育でバイトしている市内の学生が江別っていいなと思ったり、市内で活動をしていた学生が大学を出た後、江別に戻って子育てしようかなというようになってくるのかなと感じる。私も通勤族でどこの地域も好きだったが、今は江別で働きたいと思って、江別で再就職したのでそのような人が増えてくれればいいかなと思っている。

○保田委員

2つあるのだが、一つは中学生の時の職業体験などによって保育の魅力を知ったとか或いは子供たちと触れ合ったとかの経験がうちの大学を選んだ理由になっている。大学祭では、江別市内や札幌近郊も含めて400名ぐらいの子供たちが来て遊ぶ「子どもの国」というイベントを実施した。そうした経験を通じて、保育に従事するなら地域は関係ないとか、或いは給料が同じぐらいであれば、むしろ人が温かいところで就職したいということも出てくるので、触れ合う機会とか、職種や年齢も超えて交流できるサロンのような機会が増えてくると地域の魅力を知る機会に繋がるのかなと思いつながりながら聞いていた。

もう1つは、先ほども東川町の話もあったが、例えば札幌で就職したいといていた学生がむしろ小規模保育をやりたいと南富良野町で就職したことがある。江別に就職してもらいたいとか定住、定着してもらいたいという時に、最後の決め手になるのは、その地域の魅力を知ることと、都市部ではできないことが地方ではできるということを知る機会なのかなと思っている。江別はある程度大きい部分もできるし、小さいところもできるということで、大学で魅力を知るだけではなく、中学生とか高校生の時のインターンシップや職業体験みたいなものもより活発化すると、世代を超えた形での魅力になるのかなと思った。

○福沢委員長

お二方から貴重なご意見をいただいた。ご意見として承るということでよろしいか。次、7ページの基本目標3に行かせていただきたい。基本目標3は、子育てや結婚、出産に関する部分となる。基本的方向が4点あり、うち3点が新しく加えようとするものである。皆様からご質問ご意見はあるか。

○畠山委員

「外国語教育や教育DXの推進による学習環境の向上」では教育のいろいろな面があるかと思うが、例えばこの中にフリースクールの誘致や、言葉が適切かわからないが不登校に関する支援というものは含まれてくるのか。

○事務局

不登校の生徒の支援という意味では市でも力を入れているところである。スポットケアという取組を強化して新しい施設で進めているところである。

基本目標3の4つ目には「学習環境の向上」と記載したが、戦略自体にフリースクールや不登校の支援というものを盛り込んではいないが、重要な問題として認識しており、ご意見として承りたい。

○保田委員

子育て支援制度を利用していてもなかなか働けない理由の一つに、急な預け先がないということがある。特に外から転入してきた方は周りに預け先がない。熱がある状

態では認可保育所の一時保育は見てくれず、病児保育を探さなければならない。ファミリーサポートも事前予約が必要なので、急な対応は難しい。急な預け先がない状態では、なかなか働きたくても働けない。

子供のケアで抜ける時の労働環境も整えていかないといけないので、働きたい人、子育て支援する人、雇用する企業の3本柱をどのように支援するのが、切れ目のない支援にも繋がると考える。有休を消化してしまい減給されて休んだり、自分の子が熱を出しても休めない保育士がいるように、支える側の保育士ですら働くことが大変という状況もある。休みたいときに休めるような労働環境の整備と、さらに急な預け先の確保や、ファミサポを使えないときに民間のアプリなどでつながれるような仕組みなど、市町村ごとのやり方があるのかなと思う。あとは発達に不安を持つお子さんへの職員加配が足りず受け入れ拒否されたり、0歳から2歳児といった利用料の高い世帯に対する支援なども検討すると良いと思う。

○福沢委員長

ありがとうございます。この1番目と2番目は繋がっている部分もあり、地域全体で支える切れ目のない支援と、子育てできる環境整備の推進、この辺のところに関係したご発言かと思う。非常に重たい意見でしたが、ご意見として承るということでよろしいか。

○事務局

こちらワークショップの中で、江別まちなかしごとプラザを利用されている子育て世代から保田委員のお話非常に近いものがあった。江別でも非常に力を入れているところであるが、人手の問題もあろうかと思っている。今年から新たに設置された子ども家庭部でも、子育て世帯に対する支援の重要性を認識しているところであり、今日こういうご意見があったということをしかりと伝えて参りたい。

○千野委員

保田委員がおっしゃっていた小さい時の支援だけではなく、全体的に教育、行政としては若い世代の結婚、出産、子育て時期の就業の支援をすと言いながら、健康診断の保健師さんだったり、学校の先生だったり、障がい児の支援員さんなどから、「お母さんは仕事を辞めて、子供をちゃんと見てください。」という発言が、行政側から投げかけられることはすごく多いと思う。一貫して家庭や保護者を支援するということは、一番頑張らなければならないというのが切実な問題としてある。

○小橋委員

私も子育てした経験や管理職の経験があるので、有給がなくなって困ったとか、コロナで人出が足りなくてすごく困ったとか、そういうようなお話は、両方わかるところがある。

サービスがあっても慣れているところにしか預けないとか、公的サービスでは限界があるということも分かるので、企業側の柔軟性も求められているのかなと感じる。熱があっても子供を連れてこれる環境を整えとか、他の職員に見てもらいながらとか、みんなで協力し合ってどこまでできるのか話し合えるようになると良いと思う。

○福沢委員長

まさにこの1つ目の支援体制の構築というところに関わってくることだと思う。民

間がやりやすいように、市としてどのような支援ができるかということかと思う。

○佐藤裕則委員

私は子供がいないので、あまり偉そうなこと言えないが、子育ての仕組みが良くなっても、結局、女性、お母さんの方が大変になるといったことがある。共稼ぎの夫婦が増えていても、家事や育児もやって大変ですねという言葉が夫がかけられるということは少ない。地域全体で支えるという言葉は良いが、お父さんお母さんも子育てや育児に参加しやすいような環境づくりも大事ではないか。例えば、子どもが急に熱を出した時、お父さんが勤務する江別の会社は休んでも良いと言ってくれるようになれば、お母さんも江別に住んで良かったと思えるのではと感じた。

○鈴木委員

子供の預け先やお母さんたちの困難感に関して、看護師の経験で、子どもの体調が悪くて休む職員の穴埋めとして出勤してくれるバックアップナースという体制のある病院で働いたことがある。かなり大きな大学病院だったのですべての民間企業でできるかや、市の方たちのサポートがどこまでといった課題はあるが、辞めずに働き続けるという点では、ファミサポや病児・病後児保育のように子どもをどうするかだけじゃなくて、気兼ねなく休めて安心して働ける体制も必要だと感じた。

○福沢委員長

この基本目標3のところ、かなり白熱した重たい議論がたくさん出てきた。これをどのように具体的な施策に落とし込んで、なおかつKPIを設定するとすると、非常に難しい作業になるが、子育ての現状等について意見が出たので、それを踏まえていただければと思う。

○龍田副委員長

子育ての議論もそうだが、団塊ジュニアの世代は子育てが一段落してきて、両親や祖父母の介護の問題が出てきている。出生率が非常に低いので、こうした人たちがどんどん増えていく形になると、住み続けられるかの問題は今後、逆にこっちなんじゃないかなと思う。そういった辺りにもフォーカスするとオール世代に響くような話になると思い、意見を述べさせていただいた。

○福沢委員長

それでは最後の8ページ、基本目標4に移らせていただく。地域連携、或いは健康、共生のまちづくり、国際理解、公共交通といった地域の魅力づくりである。基本的方向が6点あり、そのうちの3点が新しく加えたもの。皆様から質問や意見をお受けしたいが、まず、私から2点ほど発言させていただきたい。

これまでも何回か申し上げたが、外国人が非常に増えていて、1070人になったそうである。基本的方向性では「多様な主体が活躍する共生のまちづくり」とあるが、多文化共生が1つのキーワードだと思っているので言葉として入っても良いのかなということが一つ。

2つ目は少し大きな話になるが、これは総合戦略があって、それを推進していくためには市役所内の各部署の連携が非常に重要になってくると思う。その上で、多文化共生をつかさどる部署が、今、市役所にはないと思うが、例えば国際交流だと教育委員会がやっているが、増え続ける外国人の方々に対応する専門の部署が確かなはず

である。やはり総合戦略を推進するためには、市役所内の各部署が連携しなければならず、基本目標として掲げるのであれば、企業立地推進室や新設された子ども家庭部のように組織や部署が必要ではないかという感想である。

○佐藤誠一委員

委員の中には役員の方もいらっしゃるということだが、自治会は基本的に一般市民が興味ないことの1つだと思われる。前回は少し話したDXに関わることだが、自治会活動は、全ては市民に繋がるということだと思って活動している。市のデータでは12万人の人口で世帯は6万世帯あるうち、自治会に加入しているのは世帯数の64%でしかない。大雑把な話しで言うと人口の半分しかつながらっていないということを理解しながら、どう繋げるかということだが、総務省の昨年度の統計でいうと、スマホを保有している世帯の割合は既に9割を超えている。基本目標4の表現は分からないが、こうした視点を意識して市民と繋がるのが大事な点かなと思う。

○千野委員

アクティブシニアの活躍について意見を述べたいと思う。市民活動センターでは自治会やボランティア団体の利用も多いが、お一人の方が、自治会の役員や民生委員、ボランティア活動の代表もされているといった一部のアクティブシニアの方がたくさんのお重責を負わされているということも多く見受けて、次の世代になかなか引き継げないというご相談をうかがう機会がとても多い。どうにかしてアクティブシニアの総数を増やして世代交代をしていくといった視点でKPIや施策を考えていただけたらと思う。

○佐藤裕則委員

基本目標の中で、外国人が増えている状況ときちんと向き合って、それに対応していきこうという姿勢はすごくいいことだと思う。道外の一部では外国人が増えて排斥しようとする動きがあると聞くと、外国人の方たちが住みやすいということは、おそらく、日本人の方たちも住みやすいということになると思うので、私は外国人のことをしっかり基本的方向に盛り込んだということは評価したい。

○布施委員

外国人の関係で、農業分野でも担い手不足により外国人の方に働いてもらっている現実がある。北海道は雪が降ったら農作業ができず、その間は仕事がない状態になってしまう。冬は仕事ないので他の仕事を探してという、流出してしまい次年度新たに人を探さなければならない。年間通して仕事を確保するという部分では農業でも課題になっていて、例えば秋までに収穫したものを加工して冬場に出す、春の早い時期に出荷できるものは何かということを探しながらやっている。農業分野でも先ほどの外国人の関係にも力を入れていただきたいと感じている。

○小橋委員

外国人の方の自治会の加入率が知りたいと思った。ちなみに、私の所属する自治会にパキスタンの方が加入してくれている。何かしら必要なことだと捉えてくださっていると思っているが、その方たちに江別市の情報が適切に入っているかという、回覧の内容は分からないなど入っていないと思う。パキスタンやベトナムの方に日本語を教えることの他に、日本人も最低限の挨拶が分かるとか、ちょっとした歩み寄り

必要だなど感じる。ゴミの問題も住民同士で教えてあげたりという交流によって徐々に良くなってきたことがあったので、相手に要求するだけでなく、私たちが寄り添って学ぶ機会を多くしないとダメだなど感じた。

○事務局

外国人の自治会加入率の情報は持ち合わせていなく、自治会加入している方の国籍情報を取得しているかも分からないので、後日担当に確認したい。

○福沢委員長

調べていただいて次回の会議でご報告いただければと思う。全体的には江別市として外国人の方々を受け入れるとか、外国人の方々と共に生きていくという方向性は良いことというように認識したが、いかがか。

○龍田副委員長

私どもの事業は水道工事で、ここ数年外国人からトイレ工事などの用命も増えているが、おおよそ7割ぐらいは金銭で揉めることが多い。外国人といっても一律にウェルカムかどうかは日本人の場合でもそうだが、悪い人たちが来るのは拒絶すると思う。文化の話でも例えば、外国人が多く住むアパートでは、毎日、香辛料のにおいが強くて、大家さんへの苦情が入るようだが、住んでくれているからお互い様だと言われてしまい、多文化の共生というのも難しいと思った。日本はこういう文化なんだということを外国人にも理解してもらって、私たちが幼いころから食べているものの食文化を理解しながら、落としどころは難しいが、そういう橋渡しのところが行政の役目なのかなと思う。ゴミ問題のようなルールや法律なども守ってもらうべきは守ったうえで共生の話なのかなと思う。

○福沢委員長

最後に、全体を通してご発言あるか

○矢野オブザーバー

様々な地域の創生会議を拝見する中で、共通点も多くあると感じた。特に、我々振興局としても進めているが、基本目標2の「新しい人の流れを作る」の中で、地元の愛着醸成というテーマに、元々住んでいる人や進学等でこちらに来た、外から来た人たちが愛着を持ってもらうことが全てに繋がっていくのかなと感じた。皆さんのキーワードの中で、江別市を好きになってもらい、良い地域だと思って住み続けるにはどうしたら良いかと考えた時に、子育てや雇用といったテーマ出てきたので、こうしたことも含めてシティプロモーションの推進というのは大事な項目だと思った。

○福沢委員長

続いてオンラインでご参加いただいている日本IBMの佐藤オブザーバーからご意見いただきたい。

○佐藤オブザーバー

本日、リモートで参加させていただいた。私からはDXの部分を中心に何点か発言したい。4ページの骨子案の「Ⅲ 総合戦略の基本的な考え方(案)」にDXに関する項目を入れていただいたことと、各基本目標にそれぞれ「施策を支えるDXの視点」という項目を入れていただいたことは非常に良いと思う。

一方で、基本目標ごとにデジタル化、DX化を進めていくと、個別最適になってし

まい、全体最適ができなくなる可能性がある。そうすると、コストがかさんでしまったり、市民が使いにくい仕組みになったり、後から統合できないなど様々なデメリットが生じるので、全体に横串を刺すための組織・役割が必要と考える。その役割はかなりの専門性が必要であり、他自治体ではCDOやCDO補佐官などを民間登用している事例もあるため、検討してもよいのではないかと考える。

また、デジタル化、DX化というものは自治体だけで進めることができるものではなく、自治体、事業者、市民それぞれが進めていかなければならないと思っている。例えば、「持続可能で計元気な経済を作る」というところで、スマート農業の推進や中小企業等の事業活動の支援に関して、役所がデジタル化を支援すると同時に、農業者や企業側でもデジタルを導入していくといった主体が2つ重なってきたり、市民側が使うデジタルツールや市側で用意するデバイスも様々であるので、この後のKPIなのか、事業になるのかは分からないが、それぞれの主体ごとに何をすべきなのかと、何のために、どの主体が、いつまでに、何をするのか、という主体ごとの目標が必要であり、併せて、役割分担も設定することが望ましいと思う。

○福沢委員長

ご兩名、ありがとうございます。以上で次第2の協議事項を終了する。

3 その他

○福沢委員長

次に次第3その他について何かあるか。

【各委員：無し】

○事務局

非常に活発にご議論いただき、感謝する。しっかり受け止めて策定作業に活かしていきたい。次回は素案の協議を予定しており、本日の骨子の議論を踏まえ、事務局で素案を作成し、11月下旬ごろの開催を目指したい。その際は日程調整の連絡をさせていただくのでご協力願う。

○福沢委員長

それでは本日予定していた議事は全て終了した。初めてのペーパーレス会議であり、多少のトラブルもあったが無事終えることができた。次回もペーパーレス会議での開催となるので、各自、パソコンや電源等のご確認をお願いしたい。以上を持って第2回江別市総合戦略推進委員会を閉会する。